生　活　科

石田 浩子・柳井 裕美

Ⅰ　はじめに

広島大学附属東雲小・中学校では（以降，本校とする），「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質・能力－授業づくりに必要な各教科等の視点－」をテーマとし，研究を進めてきている。児童一人一人の思いや願いを出発点にした生活科授業づくりにおいて，見通しをもって自ら学ぶこと，児童一人一人が自分の思いや願いをもつこと，身近な人々との関わりを通して学ぶことを，これまでも継続して大事にしてきた。また，他教科等との横のつながりや幼児教育や第３学年以上の教科等との接続を意識した授業づくりを通して，特に，学びの土台としての「自ら学ぼうとする意欲」を高めてきた。これらを踏まえて，児童一人一人が，「こだわり」（鹿毛，2007，pp.15～pp.23）をもって追究する面白さを実感できる学習教材の開発や２年間を見通した単元構成・授業展開の工夫を行っていく。その中で，さまざまな学びの体験を積み重ねることができるようにしていく。これらの実践を継続していくことで，具体的体験や活動を通した学びの土台づくりを行い，研究テーマに迫りたいと考えている。

Ⅱ　２年間で育てたい児童像

本校生活科部会では，【自分の思いや願いの実現に向けて追究する面白さを味わい，自ら学ぼうとする児童】の育成を目指している。追究する面白さとは，具体的には，「友達や身近な人々や環境とかかわる楽しさ」，「いろいろな物事を発見したり，不思議に思ったことを伝えたり，解決したりできたという喜び」，「なるほど，こうしたらうまくいくんだ。」という気付き，「もっと○○したい。」という自分なりの「こだわり」が次々と生まれるわくわく感などが挙げられる。

自分の思いや願いの実現に向けて自ら働きかける姿は，自分の学びを次の活動に活かしたり，新たなことに挑戦したりしようとする姿を生み出していくと考えられる。自ら学ぶ力を育成していきたい。

Ⅲ　生活科本来の魅力

本校生活科部会が考える生活科本来の魅力は，具体的な体験や活動を通して，対象と繰り返し関わりながら，自分の思いや願いを実現させていく過程にある。その過程の中で，追究する面白さや発見する喜び，対象や友達と関わることの楽しさを味わうことができる。こうした経験を生活科の中で積み重ねていくことで，学びの土台として考える「自ら学ぼうとする意欲」を高め，諸感覚をしっかり働かせて生活をより楽しもうとする児童を育むことができる。

Ⅳ　昨年度までの研究

生活科の魅力に迫り，児童と対象との関わり及び児童同士の関わりを深め広げたり，具体的な活動や体験を通して生まれた気付きの質を高めたりするために，以下に示す３つの視点を意識した授業づくりを行ってきた。

○児童が繰り返し対象と関わることができる単元構成
○児童と対象，児童同士の関わりが生まれやすい場づくり
○児童が自らの気付きを振り返ったり，互いの気付きを交流したりする活動の場における環境としての（学びを豊かにするための）教師の言葉や働きかけ

児童が繰り返し対象と関わることができる単元構成

子どもたちの「こだわり」に合わせた弾力的な展開や対象と繰り返し関わることができるよう，いろいろな内容との関連を図り，総合的に取り扱う単元構成とした。ここで言う繰り返しには，長期的に活動そのものを繰り返す「大きな繰り返し」と，活動中における課題発見と課題解決のプロセスを繰り返す「小さな繰り返し」とがある。その繰り返しの中で，友達と一緒に追究する面白さを味わえるような活動も意図的に仕組むことができる。例えば，内容（１）「学校と生活」や（５）「季節の変化と生活」，（８）「生活や出来事の伝え合い」，（９）「自分の成長」のいろいろな内容を総合的に扱って，１年を通して「くさばなステージにあつまろう」の単元を開発した。その結果，「草花を見つける」→「遊びをつくって遊ぶ」→「みんなで遊んで気付きを伝え合う」という学習内容を，春・夏・秋・冬の４回繰り返して学習を行ったことで，つくる遊びや遊び方が変化していき，材料を季節の草花のみに限定しても，遊びがどんどん広がっていくことに児童が気付くことができていた。

児童と対象，児童同士の関わりが生まれやすい場づくり

「活動形態」「物」「場所」「時間」の４点をポイントに考えた。「活動形態」では，個人の活動にするのか，グループでの活動にするのかは，その活動の目的に応じて，決めていった。学習材と出会う場面では，個人の活動にすることで，一人一人が，その学習材としっかり関わることができた。個人の活動をする中で，自然とグループが生まれ，グループ活動につながっていくことも多かった。「物」では，材料や道具を，活動の途中でこちらから提示したり個数を限定したりするようにし，活動の始めに材料や道具が全て揃っている状態をつくらないようにした。そうすることで，児童同士が関わるきっかけとなっていた。「場所」では，作ってすぐに試す場所を確保することで，すぐに結果が分かったり競争が始まったり友達が作ったものを見て真似をしたりする様子が見られた。児童同士が関わり合うことで，遊びがどんどん発展していき，新たな遊び方や楽しみ方が生まれていった。「時間」では，作る時間を十分に確保することで，相談しながら作ったり，助け合ったりする姿が多く見られ，児童同士の関わりが生まれることが分かった。

児童が自らの気付きを振り返ったり，互いの気付きを交流したりする活動の場における環境としての（学びを豊かにするための）教師の言葉や働きかけ

環境構成の一つとして，教師の言葉や働きかけを予め準備検討し，授業に臨む。児童がいろいろな事象に出会う中で見つけたり，感じたりした，その子なりの「！」「？」（面白さ，楽しさ，不思議さ）を肯定的に受け止め，共感し，価値付けたりすることを心がけた。そして，意図的に取り上げたりするのはもちろんのこと，「どうしたらそんな風になったのかな。」「前と違うってどういうことかな。」など比較を促すような言葉がけや「本当にそうなのかな。」など流れを意図的に止め，児童がはっとするような言葉や働きかけを行うようにした。

Ⅴ　生活科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力

生活科本来の魅力に迫るために，児童の思いや願いを引き出し，児童の表現からその思いをくみ取ることを大事にしたいと考えている。これまでの実践から，教員の資質・能力を，表１のようにまとめた。

表１　生活科本来の魅力に迫るための教員の資質・能力

資質・能力	視点	資質・能力の具体
授業構想力	目標設定	・児童一人一人の経験や関心を踏まえつつ，成長する児童の姿を具体的に想像し，記述する力
	教材研究（開発）	・児童，学校，家庭，地域の実態にあった身近な事象を設定する力 ・多様な活動や繰り返しが可能となるよう，やわらかな単元構成
授業実践力	指導技術	・環境構成（板書等を含む）に関する技術 ・直接的な関わりとしての話し方や言葉かけ，表情に関する技術 ・児童の姿や記述を受け止め，価値づけて返していく技術
授業分析評価力	授業分析評価	・児童の姿，児童が表現したものなどを通して，授業の次回以降の展開を調整したり，自分自身の児童理解の力を伸ばしたりする。

Ⅵ　本年度の研究計画

１　研究の目的

児童が追究する面白さを味わう授業に必要な教員の資質・能力の具体を探る。

２　研究の方法

○　「遊びを創り出す活動」を中心とした単元を開発し実践する。第１学年では，自然素材を用いて，年間を通して遊びを創り出す活動を繰り返す単元構成とする。第２学年では，牛乳パックを用いて，１年次の「くさばなステージにあつまろう」での遊び方の広がりを生かした単元構成とする。

○　児童がどのように考え遊びを創り出したか，ワークシートの記述内容や児童の姿から，思いや変容を見取る。さらに，そのきっかけとなった教師の働きかけを整理，分析する。

【参考文献】

朝倉淳編（2018）『平成 29 年改訂　小学校教育課程実践講座　生活』ぎょうせい.
朝倉淳・永田忠道共編著(2019)『新しい生活科教育の創造－体験を通した資質・能力の育成－』学術図書出版社.
鹿毛雅治（2007）『子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」』教育出版.
河村茂雄（2022）『子どもの非認知能力を育成する教師のためのソーシャルスキル』誠信書房.
田村学編（2017）『新学習指導要領の展開　生活編』明治図書.
田村学（2019）『深い学び』東洋館出版社.
無藤隆（2018）『幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿』東洋館出版社.
奈須正裕（1999）『総合的学習を指導できる教師の力量』明治図書.
広島大学附属東雲小学校（2018）『平成 30 年度教育研究初等教育』
広島大学附属東雲小学校（2019）『令和元年度教育研究初等教育』
文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説　生活編』東洋館出版社.
文部科学省（2019）『幼児理解に基づいた評価』チャイルド本社.